



富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン

～ 32 西洋オダマキ ～

職藝学院

教授 渡邊美保子

西洋オダマキはヨーロッパ原産の宿根草です。自生地では5月になると明るい林や草原などで青紫色の花が咲き始めます。イギリスでは今から400年も前に書かれたシェイクスピアの作品にも登場し、古い時代から親しまれてきた宿根草であることがわかります。現在では数多くの園芸品種があり、草丈は30cmから100cm位、花色は青、桃、赤、黄、白など様々で、八重咲きの花もあります(写真1)。西洋オダマキは、早春の庭で他の宿根草がようやく芽を出した頃には、すでに美しい銀灰色の葉を広げてくれるのでおすすめの宿根草です。

チューリップの新芽が顔を出す頃、西洋オダマキの葉は握りこぶしを振り上げたような姿で土から出てきます。一枚ずつ順番に同じところから生まれてくるように見えます。葉はゆっくり開いて鳥の羽根のような切れ込みのある形に変わってゆきます。こんもりと噴水状に盛り上がると、その真ん中から一本の花茎が立ち上がってきます。花茎は枝分かれしながらその先につぼみを付けます。つぼみが色づいてふっくらしてくると、まるで5羽の鳩が輪になってくちばしをつつきあっているような姿になります(写真2)。

西洋オダマキは、花が満開になる頃には花の付け根が釣り竿のように曲がり、うつむきながら咲

き始めます。外側の5枚の花弁のように見えているのはガクで、先端がぐるりと曲がった筒状の花弁がガクの中に挟まっています。花が終わる頃になると、今まで下を向いていた花が上を向き始めます。そろそろ種ができ始めましたよ、という相図です。しばらくすると花弁とガクはパラパラと地面に落ちてゆきます。くたびれた雄しべをくっつけて緑色の種が現れます。花が咲いている時には曲がっていた茎は、今度はお天道様の光をまんべんなくもらえるように真っ直ぐになります。一番初めに咲いた花が種になってもその下のつぼみたちは、ゆっくりと咲いてゆくので開花期間は3週間ぐらいです。種が赤紫色に変化してゆく姿も美しいので長く楽しめます。

西洋オダマキは、明るい半日陰から日向を好みます。水はけがよく有機質に富んだ土なら表面が乾きやすい場所でも良く育ちます。宿根草の中でも寿命は短く4～5年も咲いてくれたら頑張ったほうです。西洋オダマキはいろいろな品種を一株ずつ点々と植えると、うつむいて咲く優しい色合いの花が空中で踊っているように見えてきれいです。こぼれ種で増え自然に交配して親とは違った色の花が咲きますので、自然風な庭づくりと偶然を楽しみたい方にはぴったりの花です。



写真1 西洋オダマキの八重咲きの園芸品種。5月初旬。淡い紫の部分がガクで、その下の白いのが花びら。



写真2 一重咲きの西洋オダマキ。くちばしのように見える部分には甘い蜜がある。ハチが好んで訪れ受粉する。